

連載 プロマネの現場から 第 127 回 中国のユニコーン企業

蒼海憲治 (大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監)

中国が日本の GDP を抜いたといわれるのが 2010 年ですが、現在は約 3 倍になっています。その中国の経済も 10% 成長率を下回るようになり、一時の勢いを失ったといわれるものの、実際には着実に実力をつけており、すでに IT 業界においてはシリコンバレーに並んでいるのでは、ということもよく見聞きするようになりました。

そして、そのことを示す指標の一つが、ユニコーン企業の数ではないか、と思っています。

ユニコーン企業とは、設立から 10 年未満で、企業評価額が 10 億米ドル以上の未上場のベンチャー企業を指します。

昨年時点、世界には合計 261 社のユニコーン企業があるといわれています。

ユニコーン企業と聞いて思い浮かぶのは、ウーバー、テスラ、Airbnb などのシリコンバレーの企業です。しかし実際には、米国が 121 社に対して、中国は 76 社、日本は 22 社となっているというレポートがあります。しかも、中国には欧米の調査会社がまだ把握していない隠れユニコーン企業があるともいわれており、それらの企業を加えると中国は 191 社にもなるともいわれます。

また、それを裏付けるベンチャー市場の資金調達力ですが、米国が 6.4 兆円に対し、中国は 6.5 兆円とほぼ同額に並んでいます。ところで、日本は、米国や中国と資金調達方法の前提が異なるとはいえ、約 30 分の 1 の、2000 億円にすぎません。

つまり、スタートアップのエコシステムは質・量ともに米国と完全に並んだとみることができます。

「一日当たりの新規起業数」を見てみると、米国が 1600 社、日本が 300 社である一方、中国には「大衆創業、万衆創新」という合言葉がありますが、なんと 12000 社、年間で約 400 万社が起業しています。深圳では、就職するより、起業する方が易しい、という人もいるようなほど起業へのハードルが低いようです。

このあたりの感覚ですが、社会の変化量 = 「規模 × スピード」として、ざっくり考えてみると面白いと思っています。

日本と比較してみると、人口 1.1 倍 (1.3 億人対 1.4 億人) × 2 ~ 4 倍 (社会のスピード) = 2.2 ~ 4.4 倍。つまり、40 倍とみなすと、中国と日本の「一日当たりの新規起業数」に一致しています。このシリコンバレーを遥かに超えるスピードには、圧倒されます。

2017年時点で時価総額上位のユニコーン企業は、以下のようになっています。

1. アント・フィナンシャル
2. 滴滴出行 (ディディ・チューシン)
3. シャオミ (小米科技)
4. アリババクラウド
5. 美团点评 (メイトゥアンディエンピン)
6. 寧徳時代新能源科技 (CATL)
7. 今日頭条 (Toutiao)
8. 菜鳥網絡 (Cainiao)
9. 陸金所(Lufax)
10. 借貸宝 (ジェダイバオ)

日本では名前が知られていない企業が多い (もしかしてほとんど?!) かもしれませんが、企業価値はいずれも100億ドル (約1.12兆円) を超えており、「スーパーユニコーン」とも呼ばれていて、この上位10社の企業価値は、合計で3352億ドルに達しています。

ところで、中国のユニコーン企業の所在地をみると、意外なことがわかります。

一番は北京で全体の43%を占め、以下、上海22%、杭州10%、深圳9%となっています。何と言っても、北京には、科学技術に関する人材・大学・科学研究所等が集中しています。続いて、国家科学技術部・中国科学院の支援で重点的な投資がされてきた上海。アリババが本社を置く杭州。テンセントやファーウェイなどがある深圳。この4つの都市で、8割以上を占めています。

個人的には、深圳の経済成長の勢いを感じておりウォッチし始めていましたが、中国国内であれば、残りの3つの都市をフォローする必要性を再認識しました。

中国で新規起業が多い理由ですが、以下のような風土があることによります。

まず、起業家マインドの面です。

- ・良いところがあれば完璧に真似する。
コピーすることに躊躇しない。コピーを通して技術習得、技術革新を図る。
- ・トライアンドエラーを高速で繰り返す。

たとえば、日本が慎重に1回の開発サイクルをまわす間に、3回まわし品質改善を図る。

- ・スクラップ&ビルド

既存システムや現行システムの制約・しがらみにとらわれずに捨て去り、新しく作り直す。

- ・起業へのハードルが、日本からは想像がつかないほど低い

自社においても、ソリューション指向のマネージャの約半数が、自分の会社を作っていた経験があります。会議での議論の途中で知り、「なるほど」と思った次第です。

- ・「とりあえずやってみる」チャレンジ精神

次に、起業を支える環境面です。

- ・人口・資産を使った圧倒的物量戦

すべてが日本の1.1倍の規模の経済が働く。

- ・行政の態度

「やってからやってはいけないことを決める」のが中国で、

「やる前にやっていいことを決めようとする」のが日本。

そのため、日本は行政が、やっていいことを決めるまで、新しいことに手をつけられない。または、後出しじゃんけんで罰せられる可能性があるため、チャレンジしにくい。

- ・強大な超長期独裁国家なので長期スパンの投資ができる。

これも意外なことですが、欧米企業からみて、少し前の日本のように、政権や首相がコロコロ変わるよりも、中国の方が経済的環境としては安定しており投資しやすい、という見方もあります。

- ・多産多死を容認する。

生き残った1社が9.9社分の雇用を創出しています。

ユニコーン企業だけでなく、中国の企業の恐るべきところは、国内に1.4億人ものマーケットがありながら、世界の市場を見据えているというところだと思っています。

東南アジア、インド、中東などに出ている中国スタートアップ企業は多く、最初から海外展開・グローバル展開を狙っています。その理由の一つは、中国国内の競争が激しすぎるため、新興国の競争は緩いため勝てるためです。そして、実際に、勝ちつつあります。

中国には、人口減少、高齢化、一人っ子政策、地域格差、企業格差、エネルギー、環境、財政肥大化など様々な社会課題があります。

しかし、この山ほどの問題を、AI・ロボット・IoTなどで解決しようとするベンチャー企業からすると、中国のマーケットは、ソリューション創出・ソリューション提供の宝の山と捉えることもできます。

日本から飛行機でわずか2時間ほどのところにシリコンバレーがあることに気づくのであれば、世界の他の国々からみると、日本は極めて有利な立地にある、と考えることができます。

ただし、現時点、QRコードでのキャッシュレス決済は、中国の銀行に口座がないと体感できないため、旅行者・出張者にとってかえって不便な環境にあります。そのため、生活者目線でどのような変化が起きているのか、非居住者が実体験するのはなかなか難しいと思います。

そのため、今回の赴任の機会を通して、しっかり現地の動向をウォッチしていきたいと思っています。